



黄 智慧
文化人類学者

十月二十五日、台湾では「光復節」と呼ばれる祝日が催された。一九四五年、最後の台湾総督だった安藤利吉から降伏文書を受け取った中国(当時は中華民国)が、実質的な台湾支配を開始した日を盛大に祝った。

反面、本来の戦勝日であるはずの八月十五日に儀式は一切催されない。戦後台湾に来た国民党政権がこの日を意識的に忘却しようとして、こうした奇妙な対照が起きたのである。
五十年の間、日本の植民地支配を受けてきた台湾人は、終戦の玉音放送を耳にして、解放感を味わいもしたが、地に伏して涙も流した。「祖国日本」を

信じ続けてきた純朴な旧日本軍人の証言では、「当日は全部隊が不安と焦燥と悲嘆のどん底、目標も展望も何もないという状

理は、後々まで多くのしこりを残した。敗戦によって、結果的に日本は、台湾支配権の放棄を宣言したのみで、その後の支配者がだれになるのか、住民がいかなる境遇に陥るのか、といった問題には一切知らぬ顔を通しているように見える。

戦の日から光復節までの二か月余り、台湾人は解放から接收までの追体験を毎年繰り返して、アイデンティティーの「さまよえる時間」を過ごす。彼らの心情は、李登輝前総統が吐露した「台湾人として生まれた悲哀」そのものである。

旧軍人や軍属の処遇、戦時貯金といった戦争の罪責は、民間の努力でようやく追認されるようになり、戦後五十年余りも負い続けてきたそうした「債務」への賠償や補償は、二十世紀最後の年になって一段落した。

だが、日本側が定めた期限が切れた後は、日本政府は沈黙するのみである。年老いた旧日本人として生まれ、いつまでも等身大に見ようとしていない日本の外交認識は、硬直の一語に尽きる。日本の植民地だった台湾を、互いの手で忘却の中から引き出し、お互いが納得できる付き合い方を再考すべきだろう。そうしない限り、日台関係も、そして中台問題も原点を見据えることとなる。

台湾人「さまよえるのか月」

論点

態の中にあり、翌朝には自殺者も出た。衝撃はそれほどに大きく、台湾の人々に終戦を知らせることができず、できるはずもなかった。そもそも、米國を含めた戦勝国の発想で執行された終戦処

異民族の支配は受けまいという彼らの期待は、やがて裏切られる。新しい支配者との衝突が起きる度に、日本のシンパではないかと疑われ、疎外された。このような構図は、世界の他地域のポスト・コロニアル(植民地後)の状況とは随分異なる。

日本が台湾人の心に落とした影は、今も消えてはいない。終戦の日から光復節までの二か月余り、台湾人は解放から接收までの追体験を毎年繰り返して、アイデンティティーの「さまよえる時間」を過ごす。彼らの心情は、李登輝前総統が吐露した「台湾人として生まれた悲哀」そのものである。

だが、日本側が定めた期限が切れた後は、日本政府は沈黙するのみである。年老いた旧日本人として生まれ、いつまでも等身大に見ようとしていない日本の外交認識は、硬直の一語に尽きる。日本の植民地だった台湾を、互いの手で忘却の中から引き出し、お互いが納得できる付き合い方を再考すべきだろう。そうしない限り、日台関係も、そして中台問題も原点を見据えることとなる。

台湾大卒。83-90年に阪大大学院など日本留学を経て、台湾中央研究院助理研究員。41歳。